様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　４月　２０　日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００８　～　２０１０
課題番号：２０７２０２４５
研究課題名（和文）　中国の葬儀改革に関する社会人類学的研究：国家と人々を媒介する分節集団の事例研究
研究課題名（英文）　Anthropological study about funeral reform in China: a case study of worker of Shanxi's local crematorium.
研究代表者
田村　和彦　（ＴＡＭＵＲＡ　ＫＡＺＵＨＩＫＯ　）
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：６０４１２５６６

研究成果の概要（和文）：
本研究は、中国の葬儀改革を考察するものであり、その際に人類学的手法を用いて、地域の殯儀館(セレモニーセンター)で働く人々に注目することに特色があった。現代中国では、旧来の葬儀にまつわる慣習を「封建的」と位置づけ、これを改革するために、厳しい葬儀に関する政策の作成およびその実施機関である殯儀館運営を行っている。本研究では、こうした現政権の施策によって、殯儀館が政策と遺族を媒介する位置を占め、両者を調整し、政策的画一性を保持しつつも葬儀に関する行為や観念の多様性を生み出す結果となっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In this project, I tried to analyze the transformation of Chinese funeral rites, by focusing on local crematorium's working people from anthropological approach. For reforming funeral behavior and idea, state severely manages mourning policy and crematorium. This study reveals that local crematorium's working people play the role of medium, they adjust funeral policy and bereaved family, they make political conformity and cultural diversity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：文化人類学・民俗学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：中国研究・生死学・社会人類学・文化人類学

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の研究動向として、中国の葬儀改革をめぐる研究は、農村部のモノグラフの一部として、あるいは断片的な火葬をめぐる報告を中心に記述されてきた。数少ない、葬儀改革を主要なテーマのひとつとする研究群では、Whyte & Paris(1984) や Jankowiak(1993)の研究視野に見られるように、殯儀館で火葬を行うことを伝統的思考から共産党的思想への転換の表れとして扱われる傾向があった。しかしながら、1999 年以来継続している農村部でのフィールドワークの結果から、葬儀改革政策が一般によく知られているわけではなく、むしろそれらを解説し、実行する人々の介在によって今日の葬儀改革が成り立っているという仮説を見出すにいたった。

また、葬儀の研究自体は、すでに漢民族社

会の人類学的研究のなかでも重厚な蓄積と重要な指摘をもつ領域となっているが、ジェイムズ・ワトソンが的確に指摘したように、遺体処理の慣習についての調査研究は、いまだ研究の少ない領域といえる(1988(1994))。そこで、火葬施設従事者を対象とすることで、研究の少ない領域をカバーし、従来の見解を検討する必要があると思われた。

加えて、中国を対象とする研究においては、都市部における組織を対象とした人類学的成果がいまだ少ない。地方都市や都市内部での組織の人類学的研究はまだ端緒についたばかりであり、今後展開するであろう議論のためには具体的な調査とデータが必要とされる。このため、中国における人類学的組織研究を射程におさめる形での調査研究を実施することとした。

２．研究の目的

本研究は中国における死者の処理をめぐって展開する葬儀改革について社会人類学的なアプローチを用いて研究を進めた。20 世紀初頭から繰り返し行なわれてきた近代化の一環としての葬儀改革と、1949 年以降の社会主義化のなかで進められている国家政策としての葬儀改革のもと、改革を行なう人々と改革の受け手である人々に焦点を当てることで、遺体の処理という生死の境界を新たに分割し意味を与えつつある、文化の受容をめぐる人々の実践を考察することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、葬儀改革政策での現代中国の葬儀を、政策知識の不均衡と葬儀という実践の必要性という仮説のもと、政策と一般の人々が直接出会う場として、殯儀館を設定し、ここでの従業員をある種のグループとして捉える点に方法上の特色を認めることができる。「研究開始当初の背景」で述べたように、本研究で取り上げる問題について、先行研究の不備についての問題群は、考察の対象を国家の政策と人々の実践を対置させる形で想定する枠組みを、そのまま目撃あるいは体験される現象に当てはめたことにある。本研究では、こうした単純化による理解不可能性を回避すべく、複雑社会としての中国の構成に基づいた社会モデルを踏まえた方法を試みた。それは、同時に、人類学的研究史においては古典的ながらも、今田に十分な検討を必要とする問題系、すなわち、個人と社会との関係をより明確に考察するための手法ともなっている。

具体的には、方法は以下の 2 点に要約できる。

（１）　殯儀館のフィールドワーク

殯儀館従業員、とりわけ火葬従事者を中心に、彼らの参入動機、技術習得の過程のインタビューを行い、そのうえで、実際に調査者も含めた実働による参与観察を経て、言語化されない知識の領域を含めて、その技術の成り立ちと業務上の工夫、そしてそれらがサービスという領域を考察する。文書化された政策が一度、人々が従業する労働とそれを構成する組織に回収されることで、再度語り直され、政策を守りつつも、各地で多様な葬儀に関する行為を現出させているメカニズムについて考察した。このことは、死者や遺族が直接向き合うのは、法律そのものではなく、それを運用する人々であることを再確認し、運用する人々もまた、遺族や死者とある程度共通する知識基盤のなかで生活をする人間であることを改めて強調することとなった。

（２）　火葬の普及に関する文献資料収集

葬儀改革のうち、とくに火葬の普及と殯儀館施設についての文献資料を収集した。これらの文献を収集、分析することで、火葬普及期間の作業の再構成が可能となり、退職作業者を中心とする人々の記憶による初期の火葬状況の再構成と比較することができた。先行研究では、モノグラフの一部、あるいは民政にかかわる制度史の一部としてのみ葬儀改革が検討されてきたため、1949 年以降の改革を散逸している文字資料から総合的に検討する機会がなかったことによる。この作業を経ることで、収集整理された資料群を隣接諸科学と検討する場を形成する必要があった(この成果の一部は、日本史、西洋史の研究者とディスカッションを行った『七隈史学研究大会』2009 年小シンポジウム参照)。

管轄省庁の概説的記述ではなく、実際の葬儀改革を進展させてきた行政文書を中心に収集したことで、今後の議論を深化させる基盤を形成しつつあるが、3 年間の時間においては、場所を限定する必要があり、上海、北京、陝西省を対象に行政文書の収集を進めることとした。上述のうち、北京、上海は全国の葬儀改革を先導してきた地域であるため、

今後、他地域の調査を進めるうえでも有用であると判断した。陝西省については、本研究の中心的参与観察対象が含まれる行政区分であるため、集中的に資料収集を行った。

４．研究成果

研究の背景と方法の記述で述べたように、本研究では、現代中国の葬儀改革をめぐる理解枠組みの精緻化をめざし、地方都市内部の葬儀施設という組織を対象とした人類学的研究を研究方向に掲げた調査研究を行った。具体的には、国家の政策と人々の行為を直接対峙させることで、そのズレを人々による反抗や無知に回収することなく、実際に遺体の処理を行う火葬施設をめぐる空間への参与観察を行うことで、葬儀改革のメカニズムをより的確に把握しようとする試みであった。その成果は、次のようにまとめられる。まず、時間をかけて繰り返し同じ火葬場を訪問調査することで、一定の信頼関係を構築することができ、従来中国国内においても困難とされてきた火葬場で働く人々の作業への参与観察のなかから、遺体の処理を巡る技術の変化、現場知のありようを考察し、こうした微細なレベルから死をめぐる文化変容を捉える考察を可能とした点が大きな成果といえる(この調査をめぐる思考および成果は、中国で行われたフィールドワーカーの研究大会である「第七回民間文化青年論壇：民間信仰與文化遺産国際学術研討会」(2009：珠海)でも一定の評価を得た)。

この作業の結果、従来の中国の死をめぐる諸研究では、文献資料の分析を中心とする政策の変化や、葬儀に遭遇した遺族の側からの断片的アプローチが中心であったが、本研究では、国家の定める政策と遺体の適切な処理を必要とする人々を媒介する集団としての殯儀館従業員(遺族接待係、火葬従事者)の役割に注目し、かれらを「社会的間接」と捉えて、現代中国における死の位置づけの変容における作用を考察することが可能となった。中国国内においても、殯儀館に対してこうしたアプローチによる研究はいまだ行われていなかったことから、一定のインパクトがあったといってよい。文字化されていない知識の集積として火葬という新たなテクノロジーが運用されていることを再確認するとともに、政策とその運用、先行する文化知識が実践のなかで多様な形式を生みだし、試行錯誤を経ながら新たな遺族へのサービスとして定着し、現代中国の遺体処理の政策にも部分的に影響を与えうるような双方向性があることを明らかにすることができた。

残された作業として、本研究は現在火葬が普及しつつある西北地域の殯儀館を調査対象としたが、ここで得られたモデルがどの程度の射程をもつものであるかを検討できなかった。今後、上海や北京といった中国における火葬普及政策の先進地域における同様の調査が必要となろう。また、今回は死の処理として直接的に火葬場を対象化したが、実際の殯儀館の作業は、遺族の接待を行うサービスワーカー、遺体の搬送を専門に行う遺体運送者など、様々な業種に細分化されている。調査の過程で、死を演出する殯儀館追悼会会場もまた重要な意味を持つことを確認した。この追悼会については、機会を改めて調査を行うものとする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① <u>田村和彦</u>「ふたつのタイプの葬送儀礼からみた、現代中国における「死」の位置

づけに関する報告ー陝西省中部地域における都市部と農村部の葬儀を事例としてー」『七隈史学』、査読なし、Vol.12、pp.27-42、2010年3月

② 田村和彦「中国民俗学の現在ー現地調査と民俗志を中心にー 」『日本民俗学』(特集:海外の現代民俗学ー東アジア編ー)、査読あり、Vol.259、pp.28-56、2009年8月

③ 田村和彦「現代中国の葬儀ー「殯儀館」を中心に 」『アジア遊学：東アジアの死者の行方と葬儀』諏訪春雄(編)、査読なし、Vol.124、pp.158－167、2009年7月

〔学会発表〕(計 3 件)

① 田村和彦「ふたつのタイプの葬送儀礼からみた、現代中国における「死」の位置づけに関する報告ー陝西省中部地域における都市部と農村部の葬儀を事例としてー 」七隈史学研究大会、2009年9月26日、日本(福岡)

② 田村和彦「試論現代大衆生活変遷背景下民俗学的走向ー以陝西省中部一村落的当代建碑活動為例」第七回民間文化青年論壇:民間信仰與文化遺産国際学術研討会、2009年8月7日、中国(珠海)

③ 田村和彦「近年の墓地をめぐる経験について(１)ー中国陝西省村落の事例からー」、日本民俗学会第60回年会、2008年10月5日、日本(熊本)

〔図書〕(計2件)

① 田村和彦「現代中国における墓碑の普及と「孝子」たちー陝西省中部農村の事例からー」(『中国における社会主義的近代化』(小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編)) 勉誠出版、査読あり、pp.87－121、2010年12月

② 田村和彦「「死」をめぐる革命と民間知識—陝西省中部地域の公共墓地産業と葬儀改革を事例として—」(『革命の実践と表象—現代中国への人類学的アプローチ』(韓敏編))風響社、査読あり、pp.215-250、2009年3月

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者

田村　和彦　(TAMURA KAZUHIKO)
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：６０４１２５６６

(2)研究分担者

なし　　(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　　(　　)

研究者番号：